



創立:2005年 学生数:9,185人(2016年5月現在)  
南大沢キャンパス・日野キャンパス・荒川キャンパス

# 首都大学東京 ボランティアセンター

東京都八王子南大沢1-1 首都大学東京 南大沢キャンパス 1号館1階  
TEL.042-677-1354  
tmu-volunteer@jmq.tmu.ac.jp  
http://www.gs.tmu.ac.jp/gakuseika

## 設立のあゆみ

- 2015.04** 東京都が設置した大学だからこそ2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会でもやらなければならない役割があるという認識のもと、東京都とも連携したボランティアセンターの設置を検討
- 2015.06** ボランティアセンター設立準備委員会を設立  
アドバイザーとして都市教養学部人文・社会系の室田信一准教授が参加
- 10** ボランティアコーディネーター採用
- 2016.01** ボランティアセンター開設  
体制はセンター長、副センター長、事務長、ボランティアコーディネーター1名



## ■ ボランティアセンターのミッション

〈目的〉

首都大学東京の使命である「大都市における人間社会の理想像の追求」の実践的な取組の一つとして、ボランティア活動を推進し、その活動を通じ、豊かな人間性と独創性を備えたリーダーシップを発揮する人材を育成することを目的として、首都大学東京ボランティアセンターが設置されました。



## ■ 年間活動状況

### スポーツボランティアプログラム

- 2016.06** ・ボランティアプログラム「事前学習I」(プログラム共通)
- 2016.07** ・スポーツボランティアプログラム「事前学習II」
- 09** ・スポーツボランティアプログラム「東京都障害者スポーツ大会の運営支援」スタート(2017.02まで)
- 12** ・首都大学東京少年少女サッカー大会～川淵三郎杯～
- 2017.02** ・スポーツボランティアプログラム「事後学習」  
・東京マラソン2017

### 地域ボランティアプログラム

- 2016.06** ・ボランティアプログラム「事前学習I」(プログラム共通)
- 2016.09** ・地域ボランティアプログラム「事前学習II」
- 10** ・地域ボランティアプログラム  
「松木日向緑地での里山保全活動」スタート(2017.01まで)
- 12** ・小学生との竹炭・竹笛づくり
- 2017.01** ・高校生との竹林整備
- 02** ・地域ボランティアプログラム「事後学習」

### その他の主な活動

- 2016.07** ・ボランティア団体フェア「サマボラ2016!」  
・「外国人おもてなし語学ボランティア」育成講座
- 11** ・「1 dayボランティア」スタート(2016.12まで)
- 2017.02** ・第3回大学生ボランティア活動展&イベント2017  
「被災地と多摩地域の架け橋」
- 03** ・活動成果報告会



## ■ 首都大学東京ボランティアセンターとは

ボランティア活動を通じ、豊かな人間性と独創性を備えたリーダーシップを発揮する人材を育成します。

### STEP1

#### 設立までの経緯

#### 都が設置した大学だからこそやらなければならない役割

首都大学東京では、「豊かな人間性と独創性を備えたリーダーシップを発揮する人材の育成」を目的に2016年1月にボランティアセンターを開設しました。「設置の直接的なきっかけとなったのは、オリンピック・パラリンピックの東京開催決定」と話すのは首都大学東京ボランティアセンターの副センター長である木幡晃氏。「オリンピック・パラリンピックを通じてボランティアが根付いた社会にしようという当時の都知事の思いもあり、都が設置した大学としてボランティア文化を定着させるために、学生ボランティアに対するサポートが喫緊の課題になっていました」と話します。

当時、Jリーグ初代チェアマン、日本サッカー協会キャプテンを歴任した川淵三郎氏が首都大学東京の理事長を務めており、「都が設置した大学だからこそ、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会でもやらなければならない役割があるはず」という川淵三郎氏と学内トップである上野淳学長とが、ともにボランティアに前向きだったことがボランティアセンターの設置を加速させました。

また、2011年の東日本大震災後には、首都大学東京にも継続的に被災地支援を行う学生団体がありましたが、木幡氏は「こうした状況の中で、学内に学生ボランティアを支えていくためにもボランティアセンターの設置が必要という機運が高まりました」と話します。



地域貢献活動を取り入れた「地域ボランティアプログラム」の様子(松木日向緑地)。

### STEP2

#### 具体化の検討

#### コーディネーターを採用して立ち上げを加速

首都大学東京では2015年6月に最初の設立準備委員会を開催。しかし当初集められたのは、ボランティアに携わった経験のない一般事務職員でした。そこで設立準備委員会では、ボランティアの専門家であり都市教養学部の准教授である室田信一氏をアドバイザーとして迎えます。最初に話し合われたのは、ボランティア活動の大学における位置付け。「ボランティアはあくまで課外活動であり学生の自主的な活動の一環というコンセプトで運営することが決められました」と木幡氏。コンセプトが決められたことにより、組織作りの方向性が明確なものとなりました。ボランティアセンターのセンター長は、もともと学生担当である副学長が務めること、運営についてはセンター長のもと学生サポートセンターが担うこととなりました。

2015年10月には、ボランティアセンターの立ち上げ経験を持つ足立陽子氏がコーディネーターに着任。足立氏は当時の様子について「まだ組織体制が固まっただけで、ボランティアセンターが何のために何

をやるのか、という設置要綱を考えるとところから始まりました」と話します。足立氏の大学ボランティアセンターでの経験を活かしながら検討が進められ、「大都市における人間社会の理想像の追求」という首都大学東京が掲げる使命を、ボランティア活動の中で実践する旨を謳った、首都大学東京独自の設置要綱が完成します。

また、首都大学東京独自のボランティアプログラムの作成にも着手します。東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会でのボランティアリーダーの活躍が期待されていることを踏まえ「スポーツボランティアプログラム」を取り入れるとともに、首都大学東京で以前より実績のあった地域貢献活動を取り入れたプログラムを立案し、南大沢の地域に根付いた「地域ボランティアプログラム」を「スポーツボランティアプログラム」と並ぶ2本柱と位置づけました。

このように足立氏のノウハウを活用したボランティアセンターの設立準備は具体化が進み、当初2016年3月を開設目標としていましたが、準備が整ってきたことで予定を前倒しし、2016年1月に開設。大学ボランティアセンターとしては後発ながら、設立準備委員会の立ち上げ後、比較的短期での設立となり、2016年にはのべ612人の学生が相談に訪れるまでになりました。



東京都障害者スポーツ大会「スポーツの集い」において競技の運営サポートをしている様子

#### 取材者の目

#### 首都大学東京ボランティアセンターの設立を推進した3つのポイント

- ・ 大学トップによるリーダーシップ
- ・ 大学の使命を具現する設置目的
- ・ 経験豊富なコーディネーターの存在

## STEP3

### 活動と成長

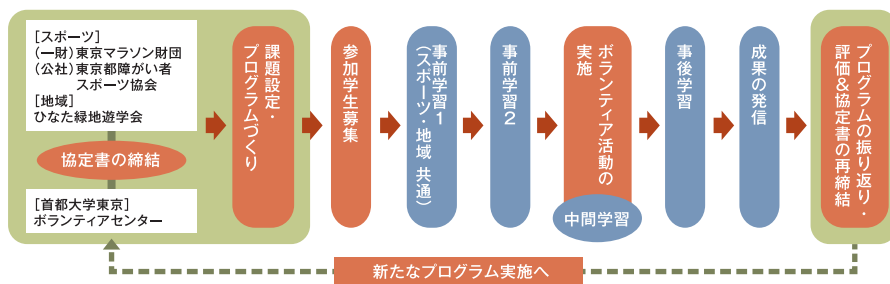
#### 学習と連動した活動を 年間を通じ継続的に実施

首都大学東京独自のボランティアプログラムとして、「スポーツボランティアプログラム」と「地域ボランティアプログラム」があります。そのうちの1つ、「地域ボランティアプログラム」では、松木日向緑地をフィールドとして、多世代による里山保全活動を行っています。松木日向緑地は南大沢キャンパス内の大学敷地であり、武蔵野の面影を今に伝える貴重な樹林帯。かつては薪炭林とし

て人々の生活に密着した場所でしたが、放置されてきたため竹や笹が拡大し、その多様な生態系にも影響を与えていました。この状況に対し理工学系生命科学コース助教の加藤英寿氏が、ほぼ1人で地道な間伐作業や生態系調査に取り組んでいました。この状況にボランティアセンターでは、多世代による里山の保全と活用によって地域の豊かなコミュニティを形成することを目標に、主にシニア世代の近隣住民で構成された森林ボランティア団体である「ひなた緑地遊学会」と連携し、通年のボランティアプログラムを設定しました。学生を募集すると都市環境学部や理工学系、法学系、経営学系、人文・社会系、看護学科など文系、理系から多様な学生が14人集まりました。「首都大学東京の独自性は、まさにこのボラ

ンティアプログラムそのものにあります。1年間継続して行っているプログラムであり、しかもボランティア活動だけでなく事前・事後の学習時間があり、ここでは学生が社会に貢献することを通じて学生自身の学びや成長につながるという目指しています。このように活動と学習を連動させるという、体系立てたボランティアプログラムが実践できている例は少ないのではないのでしょうか」と足立氏は話します。

また、こうしたボランティアプログラムを円滑に行っていくためには、さまざまな学内調整が欠かせません。こうした業務において、専門職である足立氏をサポートするセンター配属の3名(うち専任2名)の職員が存在が大きいと足立氏は指摘しています。



### 取材者の目

#### 首都大学東京 ボランティアセンターの特徴

- ・地域の資源の活用  
(大学敷地である松木日向緑地とそこで活動する団体との連携)
- ・学生の成長を促すプログラム方式の活動

## VOLUNTEER PROGRAM

### ボランティアプログラムによる学び

#### 事前学習

#### 自分と社会の接点を考える

首都大学東京のボランティアプログラムは、1年間継続して行うプログラムです。しかもボランティア活動だけを行っているのではなく、「事前学習」による意識付けと「事後学習」による丁寧な振り返りという、活動と学習とを連動させて行い、活動での経験を学びと育成につなげることを目指しています。

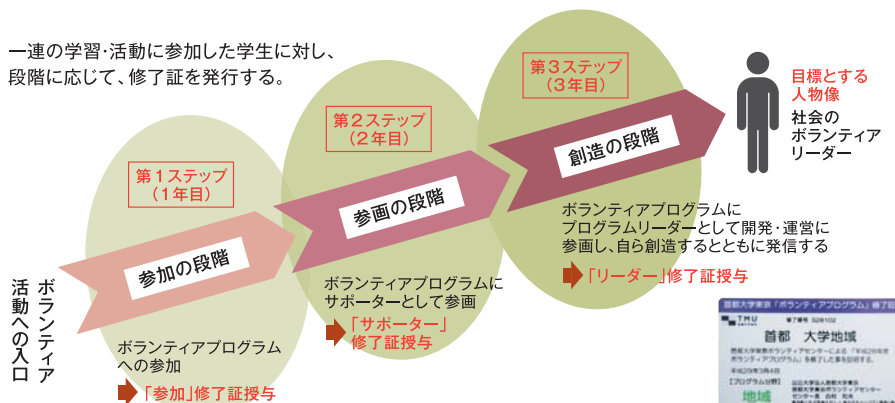
事前学習は2度あり、1回目ではスポーツと地

域のプログラムが共通して行い、ボランティアとは何かを学びます。またなぜこのプログラムに参加したのか、という自分自身の動機を明確にする作業を行います。この学習を通じて、学生はボランティア活動の基本概念でもある「自発性」「社会性」「無償性」について考えます。個々の動機とボランティアプログラムの社会性などを合わせて考えることで、学生は自分と社会の接点について考えるようになります。



事前学習グループワークの様子

一連の学習・活動に参加した学生に対し、段階に応じて、修了証を発行する。



2回目の事前学習ではそれぞれプログラムごとに分かれ、地域の課題や歴史を学び、事前の知識を備えた上で活動に取り組みます。

#### 事後学習

#### 学生同士の学び合いによる 活動の振り返り

事後学習は、学生同士の学び合いにより活動を振り返り、感じたことや自分自身の変化に気が付いていくプロセス。成長した点だけでなく、思ったよりも力が足りなかった点など、自分を客観的に評価できるようになります。プログラム型の活動は、一見すると学生を型にはめ込んでいるように見えますが、足立氏は「私たちの目的は、自分で社会課題に気づき、解決に向けて動き出せる学生を育成すること。しかしいきなりその段階を目指すのはハードルが高いので、このプログラムをきっかけに学んで欲しいと考えています」と話します。この一連のプログラムは3年間の育成計画によって自ら創造して発信できるプログラムリーダーへと成長してもらうことを目指しています。



ボランティアコーディネーター  
足立陽子氏



# REPORT

## 活動紹介

### 地域ボランティアプログラム

#### プレ企画

**親子でタケノコ掘り  
in 首都大・松木日向緑地**  
2017年4月15日・22日・29日

### 地域の小学生と タケノコ掘り体験

2017年度の「地域ボランティアプログラム」のプレ企画として、ひなた緑地遊学会と理工学系生命科学コース助教の加藤英寿氏の協力のもと、「親子でタケノコ掘りin首都大学・松木日向緑地」が実施されました。

近隣の小学校の親子や障害のある方々を招いてのこの企画は、今年で2回目(ひなた緑地遊学会が単独で開催したものを合わせると4回目)となり、学生は前年度の約5倍の29人が参加しました。

22日は柏木小学校、29日は愛宕小学校と南大沢小学校を招待し、両日の親子と先生方を合わせると237人の参加となりました。

今年はタケノコが不作で、見つからずに参加者のみなさんが随分苦労されていましたが、学生たちが見つけたタケノコを「ここにあるよ」と教えてあげる様子も見られました。タケノコは根茎

があり、掘り出すのにもひと苦労です。1つ掘り出すのにも30分ほど時間がかかり汗だくになりますが、あきらめなくて粘り強く取り組んでいる子供たちに、できるだけ自分の力で掘り出すよう学生たちも寄り添いサポートしていました。ようやく掘り出すことができた時の子供たちの笑顔は満足感に輝いていました。

さらに竹林の中を歩いてタヌキの巣を観察したり、ヘビを発見したりと豊かな自然に触れて子供たちも大興奮。昨年ひなた緑地遊学会の方から指導いただいた知識や技術をいかし、今年は学生自身が教える立場となって、子供たちによる竹の間伐体験も行われました。

### 障害者支援団体との交流

15日には障害者の自立支援活動を行う「自立ステーションつばさ」のメンバー18人とその関係者、さらに姉妹団体をあわせた合計31人との活動が行われました。

自立ステーションつばさとは、これまでも様々な形での連携を行ってきましたが、この企画に参加いただくのは初めて。首都大学東京からは昨年にも地域ボランティアプログラムに参加した学生と職員3人が参加。自立ステーションつばさの中には足が不自由な方や車いすを使用する方もおり、普段、自分たちが何気なく歩いていた歩道や活動していた緑地が、そうした人たちにとっては気軽に足を運べる場所ではないことを感じる機会となりました。

ひなた緑地遊学会によって整備がされている松木日向緑地は、広く開放的で車いすでも竹林の

中まで入ることができ、タケノコが生えている様子やタケノコ掘り体験などを行うことができます。地道な整備によって、竹林でも多様な人々が自然の恵みを得ることができるといことを実感しました。

タケノコが不作であったために、竹林に住むタヌキの巣の見学や、竹の箸や皿を使った食事など、タケノコ掘り以外の企画も行われ、普段は足を運びにくい竹林での活動は、自立ステーションつばさにとっても刺激的なものになったようでした。

### 交流を深めた自然体験

活動後には小学生から「見つけるのが大変だったけど楽しかった」「タケノコがおいしかった」という感想も。ボランティアが初体験だった学生からは「大学の敷地内にこんな自然があることを知らなかった」「子供たちとの交流が楽しく、また参加したい」という声が聞かれ、自然の中で交流が深まり、大学と地域とが連携することの良さや、ボランティア活動のやりがいを感じた1日となりました。



小学生たちとのタケノコ掘り体験



遊学会の皆さんと活動後のBBQ交流。



間伐した竹を使い竹笛づくり。

# VOLUNTEER & SCHOOL LIFE

## 学生ボランティアの意義とは

### ボランティアが 障害者スポーツの 魅力を教えてくださいました

工夫されたルールの中、楽しく懸命に競技をする選手たちの輝きは、私に障害者スポーツの魅力を教え、それまで関わりの薄かった“障害”というものをぐっと近づけ、スポーツ以外にも障害のある方と関わるようになりました。ボランティアを通して自分の世界を広げ、たくさんの方に寄り添えるような人になりたいです。



都市教養学部 経営学系 2年  
神保 彩乃さん

### 授業では教えられない リーダーシップが 確実に育まれています

一人ひとりがボランティア活動を通して成長している姿に感心します。自分たちで新たな企画を提案する学生や活動全体を見渡して自分の役割を見つけてそれに取り組む学生、自発的に他の学生のサポートを引き受ける学生など、大学の授業では育むことができないリーダーシップが確実に育まれている様子に、今後の可能性を強く感じます。

ボランティアセンターアドバイザー  
都市教養学部 人文・社会系 准教授  
室田 信一氏



### ボランティア体験は 自らを成長させる宝になります。

ボランティアセンター長  
都市教養学部 人文・社会系 教授 永井 徹氏

今様々なボランティア活動が注目されています。学生がボランティアを実践するうえで、大切なことは「自分が何か役に立つことはないか」という素朴な問題意識ではないでしょうか。そして実際に行動を起こすと、楽しいことだけでなく苦しい体験にも直面します。それを継続することで、人のための活動が、結局は自分のためであったと気づく体験になります。ボランティアの無償性は、そんな自己体験の宝を与えてくれると思います。



## 首都大学東京 ボランティアセンター 取材後記

首都大学東京ボランティアセンターの設立は、ボランティア活動を通じた人材育成が大学の使命にマッチし、トップのリーダーシップと学内の理解やそれを具体化する取組がうまくかみ合った事例といえます。また、ボランティアコーディネーターの意欲的な取組により、学生所管部門を中心に学生の成長を促すプログラム方式の特徴ある活動が展開されています。



KOKUGAKUIN Univ.

創立:1882年(明治15年)  
学生数10,389人(2017年5月現在)  
渋谷キャンパス・たまプラーザキャンパス

# 國學院大學 ボランティアステーション

東京都渋谷区東4-10-28 渋谷キャンパス TEL.03-5466-6743  
volunteer@kokugakuin.ac.jp  
https://www.kokugakuin.ac.jp/  
https://www.kokugakuin.ac.jp/student/lifesupport/p11

## 設立のあゆみ

- 2013.09** ボランティアプロジェクト委員会発足  
ボランティアステーション設置の検討  
を始める
- 2014.01** 第1回ボランティアプロジェクト委員会  
開催  
(以後、定期開催となる)
- 10** ボランティアステーション設置



## ボランティアステーションのミッション

1. 國學院大學が企画・運営するボランティア活動への支援
2. 学外団体から依頼されるボランティア情報の発信
3. 学内ワークスタディ情報の発信
4. その他ボランティア活動への支援を行うために必要なこと



## 年間活動状況

- 2017.04** 学内ワークスタディ募集
  - 05** お米ワークショップ(田植え)
  - 06** お米ワークショップ(草取り①)
  - 07** ボランティアフェア  
和装デー
  - 08** 渋谷盆踊りボランティア  
お米ワークショップ(草取り②)  
被災地支援ワークショップ
  - 09** お米ワークショップ(稲刈り)
  - 2018.01** 箱根駅伝応援ボランティア
  - 02** 被災地支援ワークショップ
  - 03** 学内ワークスタディ報告会  
渋谷学生ボランティアガイド体験講座
- ※ボランティアステーションが主催していない学内外の活動を含む。

## ■ 國學院大學ボランティアステーションとは

### ボランティアを通し「豊かな知」を身につける



教育開発推進機構  
学修支援センター長  
東海林 孝一氏

## STEP1

### 設立までの経緯

#### 「21世紀研究教育計画」に基づいた人材育成基盤整備

学校法人國學院大學では、大学の5カ年の中期計画として「21世紀研究教育計画」を策定し、2002年度から数々の事業に取り組んできました。現在、第4次計画が進行中ですが、ボランティアステーションは、2014年度に策定された第3次計画(2012年～2016年度)の修訂版(2014年度)に示された「5つの基(もと)い」の一つ、「人材育成基盤整備」に基づき設置されました。

2014年当時から既に、学生のボランティア活動は、サークルや部活動単位、箱根駅伝の応援や東日本大震災の復興支援等の大学全体で様々な取り組みがなされていました。また、学生アドバイザーやエルダーサポーターなど、学生ならではの視点で大学の運営に関わる学生スタッフ(現在の学内ワークスタディに位置づけられる)の活動も、複数行われていました。さらに、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会(以下、東京2020大会)における学生ボランティアの育成も早期に進めなければ間に合わないという課題もありました。こうした状況の中で、現在行われている様々な活動について、より多くの学生に参加してもらうように、また、学内外に広く活動を認知してもらうためにも、情報の一元化や各活動の交流を図り、それぞれの活動をより有機的に結びつけていく必要がありました。そのため、ボランティア等の活動をする学生にとって、「ここに来ればボランティアの情報が得られたり相談ができる」、「ここを基点に様々な企画や活動ができる」という場所作りが必要でした。こういった機運を受けて、「ボランティアプロジェクト委員会」により検討が進められた結果、「21世紀研究教育計画」第3次修訂版には明確な目標として定められ、2014年10月にボランティアステーションが新設されました。

## STEP2

### 新たな使命

#### 「豊かな知」を身につけた「大人」の育成

設立から4年目の現在、ボランティアステーションは、2016年度に策定した第4次計画により、新たな使命を与えられました。第4次計画では國學院大學の将来像を、「人文・社会科学系の標(しるべ)となる」、「教育目標を「主体性を持ち、自立し

た『大人』の育成」と決めました。これらを実現すべく「学生は、豊かな知(悩む力・考える力・多様性を受け入れ生き抜く力)を身につけていること」を戦略の一つとしています。「豊かな知」とは、知識の獲得ならびにそれを運用する能力であり、市民性や公共性、倫理観などを含むものとしており、正課授業での学び、サークル活動やボランティア活動、留学等を経験する中で培われるものだと考えられています。ボランティアステーションは、この「豊かな知」を持つ人材育成の一端を担い、特にボランティア活動に焦点を当てて積極的な支援を行っています。

## STEP3

### 学内ワークスタディ

#### 職業意識や勤労観の涵養

國學院大學では、学生が大学内における様々な事業やそれに伴うイベントあるいは授業・学生生活を支援するための業務にスタッフとして従事する活動として、有償の「学内ワークスタディ」制度を設けています。「就業体験(インターンシップ)」と位置づけ、学内において、教職員や他の学生たちと交流しつつ業務に従事することを通して、職業意識や勤労観を涵養し、また、経済的な支援を行うことを目的としています。

学内ワークスタディには、受験生や在校生に大学の様々な情報を発信し、オープンキャンパス等の企画立案を行う「学生アドバイザー」、在学生が自らの経験を活かし、新入生を主な対象として、基礎的な履修相談や大学生活についてアドバイスを行う「エルダーサポーター」、聴覚障害等により情報保障が必要な学生に対し、授業においてノートテイク・パソコンテイクなどのサポートを行う「ノートテイク(NT)」、大人数授業において、担当教員が授業に専念できるように、教員に代わり、教材の印刷・配布、出席カードやコメントペーパーの配布・回収・並び替えなど授業補助を行う「学生アシスタント(SA)」、学部在籍する留学生がランゲージラーニングセンター(LLC)で実施している中国語会話の場を提供する漢語角(チャイニーズコーナー)において、在学生の会話相手となり、中国語の自主学修のサポートを行う「学部留学生LLCサポーター」などがあります。

ボランティアステーションでは、これらの学内ワークスタディ組織および学内ワークスタディに準じた組織の情報発信を行っています。また、学内ワークスタディ報告会・懇親イベント等の企画・運営を含む各組織代表学生との合同会議やイベントを行うことで、組織間における連携をコーディネート

ネットしています。連携することで各々の強みが連鎖し、活動領域の拡大や各組織の更なる発展に繋がるとともに、組織連携の重要性を学ぶ機会になると考えられています。

## STEP4

### スタディツアー

#### 「ボランティア活動」に対する主体性の育成

國學院大學のボランティアステーションでは、スタディツアーやワークショップをボランティア活動に対する主体性を育成する活動と位置付け、企画・運営または紹介を行っています。特に、以下の二つのスタディツアー・ワークショップは、大きな柱となっています。

一つは、2011年3月11日に起きた東日本大震災に対する復興支援の一環としてスタートした東北再生「私大ネット36」です。この活動は、震災時、特に津波により大きな被害のあった宮城県南三陸町に赴き、3泊4日のスケジュールで復興に関するプログラムを行うものです。大きな特徴は、「被災地に学ぶ」をテーマにしている点です。これは、南三陸町の方からの、「大学生が来てくれるなら、支援をするだけではなく、ここで学んでいって欲しい」との思いを受けて設定されました。このテーマに基づき、様々なプログラムが企画され、その時その時に必要な支援や、南三陸町という地域を活かし、防災や減災、まち作りについて学んでいます。「私大ネット36」は、多くの大学の連携により設立され、國學院大學でも学生に対し積極的な募集を行っています。

もう一つは、2016年度からスタートした「新潟コメ作りワークショップ」です。こちらは、新潟県にある水田を借りて、春から秋にかけて行われた大規模なワークショップです。これは、現在の日本に様々な食がある中で、日本人が特に歴史を通じて大切にしてきた「お米」について考えてみようという試みです。参加者は、自分の手で稲を植え、草取り等の手入れをし、収穫するという過程を体験します。長期にわたるワークショップを通して、参加者は何度も新潟に足を運びます。成長していく稲を目の当たりにして、学生はやがて、作物を育てる大変さやうれしさを実感していくことになります。

### 取材者の目

ボランティアステーションの取組  
・「学内ワークスタディ」の情報発信

# REPORT

## ■ 活動紹介

### 大学と行政が協働 渋谷区連携ボランティア

学校法人國學院大學と渋谷区は、民間企業や大学等の持つ技術やノウハウを活用し、協働して地域社会の課題解決を図るための包括連携協定である「シブヤ・ソーシャル・アクション・パートナー協定」(S-SAP協定)を締結しました。ボランティアにおいても、渋谷区が募集するボランティアの紹介や説明会の開催はもちろんのこと、渋谷区と連携した学生ボランティアの推進を図っています。

例えば、東京2020大会に向けた渋谷区との取組について、長谷部健区長を招いての企画提案会を開催しました。

また、渋谷区で策定をしている駅周辺のバリアフリー化を進めるための「バリアフリー基本構想(渋谷区に住む高齢者や障害者、子育て中の方などが自立した日常生活や社会生活を送れるよう、区の公共交通施設や建物等を整備する取組)」の一環として、渋谷に通う学生のみなさんの中から、高齢者や障害者、子育て中の方々と一緒に渋谷のまちを探索し、わかったことを記録に残す「渋谷区まち歩きボランティア」についても、区の担当者と綿密な打ち合わせを重ね、募集を行ったことで、多くの学生の参加に結び付けました。

その他にも東京2020大会を視野に入れた渋谷区で行われるスポーツ活動を支える「渋谷スポーツサポーター」や「渋谷区リアル観戦事業ボランティア」があります。

“渋谷に暮らす人”と“渋谷を訪れる人”同士が触れ合うことのできる場として、また、日本らしい、渋谷らしい文化を楽しめる場として、2017年に初開催された渋谷盆踊り大会を支える「渋谷盆踊りボランティア」、親や学校だけでなく、地域で子どもを育てるプロジェクト「渋谷子どもテーブル」など、渋谷区が募集・関係する様々なボランティアに対し連携した募集を展開しています。



21世紀研究教育計画のもと学内ボランティアをとりまとめるボランティアステーション。右側から大橋聖加氏、城所俊哉氏、関祥子氏、東海林孝一氏、鈴木崇義氏。

### 渋谷区長賞受賞をきっかけに 誕生した「渋谷学生ネットワーク」

渋谷区との連携でも紹介した「東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた企画提案会」では、①東京2020オリンピック・パラリンピックをどのように盛り上げるか?②渋谷で海外からのお客様に日本文化の魅力をどう伝えるか?③渋谷にどんなオリンピック・パラリンピックの遺産を残



参拝の作法や段差の多い境内での注意点を説明する富澤さん。

せるのか?を募集テーマとした学生たちによるプレゼンテーション大会を2016年10月に開催しました。「日本文化ボランティアの養成講座・体験イベント」のプレゼンテーションを行い、渋谷区長賞を受賞したのが富澤明久さん(大学院文学研究科博士課程前期(修士)2年)のグループです。翌年の2月には、プレゼンテーションの内容をベースに、日本文化を体験しながら学ぶ「体験!日本文化ボランティアガイド」養成講座を企画し、開催しました。この養成講座をきっかけに立ち上がったのが「渋谷学生ネットワーク(シブガク)」です。2017年には、「2020を支えるのは私たちだ」を掲げ、ボランティア養成講座を更に発展的な講座内容にした「東京オリンピック・パラリンピック渋谷学生ボランティアガイド」を開催しました。「日本文化」と「多様性」を軸に、神道を学ぶ学科がある大学らしさと、ダイバーシティを推進する渋谷区らしさを織り交ぜた構成にしました。①【神社×バリアフリー】車いすを用いてバリアフリーを感じながら神社の作法を学ぶ。②【海外目線×JAPAN】訪日外国人がお勧めする日本文化について体験しながら理解する。③【日常×伝統】普段何気なく行う仕草に含まれる意味から多様な文化の理解を深める。この3つの視点からグループワークや体験イベントを行いました。特に隣地の神社の境内を借りて行われた【神社×バリアフリー】では、手水の使い方や参拝の作法を学んだ上で、車いすに乗って神社での参拝を体験しました。車椅子利用者と介助者を交代しながら体験することで、段差やくぼみのある石畳の参道に車輪を取られたり、乗車したままでは手水を上手に使えないことなど、普段、自身では気

づくことができないバリアを発見し、どのようなところに注意をしなければならないかを身をもって体験しました。

この養成講座に参加したことがきっかけに、シブガクのメンバーとなったのが佐藤麻里乃さん(文学部日本文学科3年)です。これまではボランティア活動に参加していなかった佐藤さんですが、「障害者の方が不便に感じていることを、この講座に参加し、自身が体験することで初めて気がつくことができました」と話していました。

國學院大學では日本文化の発信の一環として、七夕の1日を浴衣で過ごすイベント「和装デー」を毎年7月7日に実施しています。佐藤さんは、和装デーに浮世絵の世界観を疑似体験できるブースを設置しました。「日本ならではの文化をみんなに知って欲しい、また、自身でも日本文学科で学んだことを活かし、伝えることができるようになりたい」とシブガクの活動に積極的に取り組んでいます。

富澤さんはシブガクの代表を務め、これまでも新潟コメ作りワークショップや東日本大震災の被災地での神社祭礼のお手伝い、ユネスコ等による様々な国際交流事業など多数のボランティアやスタディツアーに参加しており、その経験から「日本古来の文化」や「多様性」の重要性を感じています。また自身も神職資格を有しており、当事者としても「神社を含め、日本古来の文化は伝統を守らなければならない一方、バリアフリーに取り組む必要も感じています。今後は渋谷の他大学や学校との連携を広げながら、日本文化を多様な人々へ発信できるような体験養成講座を企画・実施していきたい」と話していました。



シブガク代表の富澤明久さん(左)と、シブガクメンバーの佐藤麻里乃さん。



浮世絵の前で写真を撮ることで、浮世絵の世界を疑似体験する。

# REPORT

## ■ 活動紹介

### 留学生と互いの文化を紹介しよう

週に一回、國學院大學の教室で行われる「インターナショナルコーヒアワー」では、留学生と日本人学生が互いの文化を紹介しながら、交流を深めています。大学の国際交流課と連携しつつ、企画・運営を担当しているのは、2016年に発足した国際交流サークル「JUB國學院」です。毎回、6か国の留学生と日本人学生をあわせて40名ほどが集まり、ゲームをしたりお茶を飲みながら交流するという、アットホームなイベントになっています。JUB國學院のメンバーでコーヒアワーの運営を担当する岡村萌々香さん(文学部外国語文化学科2年)は、「留学生に日本のことをもっと知ってもらうために、日本ならではの遊びであるけん玉や折り紙、かるたなどを企画しま



留学生たちと一緒に仮装で盛り上がったハロウィンパーティー

した。留学生と仲良くなっていった後は、逆に留学生に先生役になってもらい、各国の言葉や文化を紹介してもらった企画も行いました」と話します。岡村さんは留学生と交流する際の注意点について「日本人は自分も含め宗教や信仰に対する意識が希薄ですが、留学生は自らの信じる宗教や信仰をととても大切にしています。それは尊重しなければなりません」と話します。米国やスペイン、マレーシアなど様々な国の留学生が参加し、まだ日本語が上手ではない留学生もいるため、学生たちは時折英語を交えながら交流を深めています。

### スクランブル交差点で国際交流

JUB國學院のもう一つの重要な活動となっているのが「ガイドボランティア」です。How can I help you? と書かれたプラカードを持って渋谷駅前のスクランブル交差点に立ち、道に迷ったり困っている外国人観光客に対しサポートを行うボランティア活動です。「外国人観光客らしい人が困っているように見えた時には、こちらから声をかけることもある」と言うJUB國學院代表の庄田源さん(文学部史学科2年)。「でもそんな時に限って、近づくともNO! って言われることが多い」と笑います。その一方で道案内をしている中で仲良くなり、一緒にご飯を食べることもあるそうです。庄田さんは高校時代に留学経験があり、留学経験をもとにもっと気軽に国際交流ができればと、協定校から受け入れている交換留学生のサポートを行うK-STEPアシスタントに登録し、1年間の



毎週木曜日に行っているガイドボランティアは、サークルに所属していなくても参加することができます。

K-STEPアシスタントの経験を経てJUB國學院を立ち上げ、代表を務めています。「外国人との交流はまず文化の違いを知ること」と話す庄田さんは、よりたくさんの人に活動を知ってもらい国際交流の幅を広げたい、とJUB國學院の目標を掲げます。

「ボランティアガイドは、英語ができないと務まらないのでは、とハードルを高く感じてしまっている人が多いように感じます」と話すのは岡村さん。しかし実は「誰もが簡単にできる国際交流」だと言います。「サークルができてまだ1年です。まずは自分たちの活動をもっと多くの人に知ってもらうこと」と東京2020大会を目前に、これからの活動に力が入ります。



サークルが立ち上がった1年。自分たちの活動を知らない人が多いという、JUB國學院代表の庄田源さん(左)と岡村萌々香さん。

# VOLUNTEER & SCHOOL LIFE

## ■ 学生ボランティアの意義とは

### ボランティア経験が学生を変えていく

教育開発推進機構 准教授 鈴木 崇義氏

学生の成長を、授業の中で確かめようとするなら、テストをするかレポートを書かせるしかありません。そうすれば、そこには数値化された学生が並び、どれだけ学修が進んだかを測ることができます。しかし、それが学生に実感として得られるかというと、そうでもないようです。学んだことがどう活かされるのか、どう使われているのか、大学の中ではなかなか知る機会がありません。

ところが、ボランティア活動によって大学という枠を飛び越え、学生たちは実に生き生きとした表情になります。3日間でも、あるい

は1日だけでも、現場に行きそこでいろんなことを体験し、いろんな人と接することによって、学生は飛躍的な成長を遂げるようです。私もボランティアの現場に赴くと、学生が大学にいる時には見えなかった積極性やリーダーシップを発揮するのを目の当たりにすることがあります。普段、授業をしている身としては、学修に加えて実践することの大切さを知った思いです。

学生にはいろんな経験を積んでほしいと願っています。何から始めたらいいのかわからない、何かしてみたい、と思う学生にはまずボランティア

ステーションに来てほしいと思います。そして、ここを通じて学生が様々な経験を積みきっかけとなる後押しをしたいと考えています。



教育開発推進機構 准教授 鈴木 崇義氏

総合企画部長兼学生事務部長 学修支援センター副センター長 城所 俊哉氏

## 國學院大學 ボランティアセンター 取材後記

ボランティアステーションはより多くの学生参加、情報一元化、活動の有機的連携を目指し、「ボランティアプロジェクト委員会」における検討を経て、國學院大學「21世紀研究教育計画」に位置付けられ設立されました。「学内ワークスタディ」の情報発信や被災地でのスタディツアーが展開されています。